

文化資源の利用をめぐる自己と他者

—中国朝鮮族村の観光化を事例に—

関西学院大学 林梅

1 目的

中国では、1980年代から民俗文化を資源とした観光である「民俗観光」が急速に広がっており、少数民族地域において特に顕著に見られる。関連研究で少数民族の文化資源は、権力者や資本をもつ漢族などの他者によって利用され、文化を創造し継承してきた当事者である現地住民や村民たちは受動的な立場におかれている、と指摘されてきた(高山 2007; 兼重 2008; 長谷 2014)。

この問題関心に基づいた本報告の目的は、中国少数民族の文化資源を利用した観光化に注目し、文化資源の利用をめぐる自己と他者の関係を明らかにすることである。

2 方法

そこで、中国の 55 の少数民族の一つである朝鮮族に注目し、その朝鮮族村の文化資源を利用した観光化を事例に取り上げる。手順としては、第一に、中国の少数民族を生きる朝鮮族を説明し、第二に、村の状況を把握する。そのうえ第三に、村の観光化のプロセスと文化資源、観光事業に参加する他者とそれに起因する問題および解決、観光事業における村と行政(国家)の関係などに基づいた考察と分析を行い、結果を示す。そして最後に、自己と他者の関係をめぐる結論をまとめる。

3 結果

朝鮮族村の観光化の事例に基づいた考察と分析からは次のような結果が得られた。

まず、何の変哲もない村が村の環境整備や水田農業の改善をもって観光化を始めたことが確認された。次いで、観光事業に漢族経営者と朝鮮族の「よそ者」という他者が不可欠であることが示された。最後に、観光事業で村と行政(国)の協同関係が最も重要であることが明確になった。

4 結論

以上からは、村の主導的な観光化が権力者と資本をもつ他者を積極的に受け入れる様相と、観光事業が自己と他者の協同関係によってこそ実現可能であることが明らかになった。同時に、自己と他者の協同関係の構築が少数民族の文化保持と継承、および少数民族の村の存続に重要な役割を果たしている可能性が示唆された。

文献

- 長谷千代子, 2014, 「観光資源化する上座仏教建築—雲南省徳宏州芒市の景観変容のなかで」 武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源—南部地域の分析から』風響社, pp.307-330.
- 兼重勉, 2008, 「民族観光の産業化と地元民の対応—広西三江トン族程陽景区の事例から」 愛知大学現代中国学会『中国 21』風媒社, Vol.29, pp.133-160.
- 高山陽子, 2007, 『民族の幻影—中国民族観光の行方』東北大学出版社.